

音楽に関する保育実習指導案作成における指導の現状と課題

The Current Status and Issues in Making Music Teaching Plans in Daycare Practicum Guidance

連 桃季恵 (人間科学部こども学科講師)

Tokie MURAJI (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Lecturer)

三 好 伸 子 (人間科学部こども学科教授)

Nobuko MIYOSHI (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

〈要旨〉

本研究の目的は、保育実習事前事後指導において提出された音楽に関する指導案作成における課題点を把握し、その後実施された保育実習での実態に応じた対応を検討することである。その背景として、2020年度保育実習Ⅱ（学内演習）で作成した指導案の主活動に音楽を取り上げた学生が少なかったことが挙げられる。2021年度の保育実習Ⅰにおいて音楽に関する部分実習実施の有無や理由に関する質問紙調査などを検討した結果、やはり音楽に関する指導案作成及び実施に関して学生の苦手意識が根強いことがわかった。結果を踏まえ、授業の改善点として、指導案作成前に学生自身が多様な音楽素材に触れて魅力を味わう場を設けること、指導案作成において音楽的な環境や援助を含む6つの留意点と活動ごとに必要とされた事項を示すこと、作成した指導案を基に音楽素材の反復実践の場を設けることの3つを事前指導や音楽に関する授業に取り入れることが考えられた。

〈キーワード〉

保育実習事前事後指導、音楽、指導案

1 問題と目的

筆者らはこれまでに、子ども主体の保育を目指す保育実習指導案（以下、指導案と記す）作成に関する授業方法について検討を重ねている⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾。本学の保育に関する実習は、2年次に学校インターンシップ（保育）、3年次に保育実習Ⅰ（保育所）及び保育実習Ⅱ（施設）に加えて保育実習Ⅲ、4年次に保育実習Ⅳと幼児教育実習がある。筆者らは保育実習Ⅰ（保育所）及び保育実習Ⅱの事前事後指導を担当している。2020年度は、製作活動に焦点を当てて、子ども主体の指導案作成の授業方法を検討した⁽⁵⁾⁽⁶⁾。レジョ・エミリアの理念に助けられ、グループでの模擬保育を学生で見合う体験などにおいて、一成果があったと考えている。つまり、一定数の学生が製作活動においては、実習生主導ではなく、子ども主体の活動を意識できるようになったと考える。

他方で、音楽に関する指導案に着目すると、保育実習Ⅰ及びⅡの事前事後指導において指導案を作成する際、主活動の内容に音楽を選択する学生が少ないように感じている。先行研究においても、保育実習では学生自身が音楽を

題材にした活動を実習内容に選択することが少ないことがわかっている⁽⁷⁾⁽⁸⁾。その理由として、制作をしたかった、園側の要望が制作であった、音楽をやろうと思わなかった、音楽が苦手、指導方法が分からないなどが挙げられている⁽⁹⁾。本学における2020年度保育実習Ⅱ（学内演習）で最終課題とした指導案作成では、主活動に音楽を用いた学生は30名中5名、主活動は製作などであるが導入に手遊びうたを用いた学生は6名であった。主活動に製作活動を取り上げる学生が最も多く（17名）、他にはバナナ鬼や色水遊び、また新聞紙を用いた表現活動などがあった。このように指導案に歌などが取り上げられないわけではないが、音楽を主活動に選択する学生が少ないといえる。これらの現状を踏まえ、2021年度保育実習Ⅱ事前事後指導において、受講している学生全員に音楽に関する指導案作成を課題とすることにした。

提出された指導案を概観すると、音楽に限らず指導案における基本の書き方の理解不足が見られたと同時に、音楽に関する指導案だからこそ見られる学生の苦手意識や迷い、そして音楽に関する理解不足（例えばリズムや拍子、

スタックカートなど音楽用語の意味)があるように感じられた。さらに、音楽に関する指導案の内容(歌遊び、楽器遊び、身体表現など)では、「歌詞を覚える」、「楽器を正しく扱う」などに重点がおかれて、実習生主導の活動形態になりやすく、学生は音楽に関する苦手意識などに加えて、子ども主体の活動をどのように保障すればよいのか悩んでいるようであった。筆者らも学生の実態を課題としながらも具体的な授業方法に迷いを感じていた。そのため、学生が指導案を作成するにあたり、どの部分で困難さなどを感じているのか、また教員側もどの部分で指導する難しさを感じたのかなど、明確に把握する必要があると考えた。

そこで、本研究では、まず保育実習Ⅱ事前事後指導における課題として提出された音楽に関する指導案の活動内容や教員からの添削などから、音楽に関する子ども主体の指導案作成における課題を明らかにする。さらに、その後実施される保育実習において音楽に関する実習の有無などに関する実態を把握し、実態に応じた対応を模索することを通して、保育実習事前事後指導における授業方法を検討することを目的とする。

2 倫理的配慮

学生には授業内に資料を配布して個人情報の保護などを説明して、研究発表の許可を得た。

3 研究方法

2021年度において筆者らが担当した保育実習Ⅰ(保育所)及び保育実習Ⅱ事前事後指導と、その後保育現場で実施した保育実習Ⅰ(保育所)及び学内演習で実施した保育実習Ⅱを本研究の対象授業とした。本研究の流れは、以下の4つであり、指導案作成における問題点の検討(3-1)、実習における音楽を用いた部分保育の実施有無などに関する検討(3-2)、指導案見本の内容検討(3-3)、見本使用の効果や課題の検討(3-4)である。

3-1 事前指導における音楽の指導案作成に関する問題点の検討

本学における2021年度の保育実習Ⅰ及びⅡは8月中旬から9月中旬を予定していたため、その時期にあった題材を用いた音楽に関する指導案を作成し、提出する課題を学生に提示した。提出された指導案20名分(20枚)と筆者らの手書きなどによる添削内容を踏まえ、指導案作成における問題点について検討した。

3-2 保育実習Ⅰ(保育所)における音楽を用いた部分実習実施の有無と理由に関する検討

事前事後指導における音楽に関する指導案作成後に実施

された保育実習Ⅰにおいて、音楽に関する実習の有無などに関する質問紙調査を実施し、現状を把握した。本学では、2021年度は保育実習Ⅰ(保育所)を保育現場における実習(9月上旬に実施)とし、保育実習Ⅱは新型コロナウイルスの感染拡大のため学内演習に切り替えた。そのため、実態に関する質問紙調査は保育現場で実習を行った保育実習Ⅰ(保育所)のみに関するものであり、参加した21名を対象とした。

3-3 学内演習における指導案見本の内容に関する検討

3-1と3-2を踏まえ、保育実習Ⅱ(学内演習)における指導案作成の際に、学生の手掛かりとなるよう指導案見本の内容を検討した。

3-4 保育実習Ⅱ(学内演習)における最終課題「歌と絵本を用いた指導案作成」に関する感想の検討

3-3における指導案の見本を学生に提示し、保育実習Ⅱ(学内演習)において歌や絵本の演習を行った後、歌や絵本を用いて音楽に関する指導案作成を課題とした。その際、指導案作成に関する感想の提出を促した。提出された感想を内容ごとに分類し、見本使用の効果と課題について考察した。

4 結果と考察

4-1 事前指導における音楽の指導案作成に関する問題点の検討

(1) 主な活動内容について

音楽活動として、歌遊びや楽器遊びの他にも、身体表現を伴う活動などが挙げられる。学生が提出した指導案における音楽活動の展開方法については、以下に示すように、7種類が確認され、指導案のどこかの場面に「歌」が多く用いられていた(20枚中17枚)。そのため、学生にとって「歌」は指導案に取り入れやすい教材である可能性がうかがえる。

【活動の展開方法】歌から身体表現遊び(6枚)、歌から楽器遊び(5枚)、絵本から歌遊び(4枚)、石や竹など身近なものから音遊び(2枚)、絵本から身体表現遊び(1枚)、実習生作の絵などから音遊び(1枚)、リズム遊びから歌遊び(1枚)

記載された歌の種類と指導案の枚数は以下のとおりである。1つの指導案につき2曲選択されていたものもあり、8月から9月にかけて実施される予定であったため、夏に関する歌が多いことがわかる。

【歌の種類と指導案の枚数】水中めがね(4枚)、うみ(4枚)、はなび(2枚)、(以下各1枚)イカイカスイカ、おきなたいこの替え歌、かみなりどんがやってきた、かもつれっしゃ、さかながはねて、十五夜さんのもちつき、たなばたさま、たぬきのとのさま音頭、バナナのおやこ、むすんでひらいての替え歌

(2) 学生の記述内容と添削内容について

全体を通して、「予想される子どもの活動」に対する記載が少なく、加筆をうながすことが多かった。学生にとって多様な子どもの姿を予想することは実際に様々な年齢の子どもとやり取りをしたことがあるわけではないため、難しいのだろう。しかしながら、多様な子どもの姿を予想するからこそ、援助などが考えられるため、教員の助言を加えながら添削することが多い部分であった。「予想される子どもの活動」以外について、各場面において添削した内容などを以下に述べる。

① 歌う場面について

主な添削内容は、子どもに歌を提示する歌唱指導の際、歌の魅力が伝わるように実習生の提示方法を工夫することである。子どもがすでに歌を知っていなければ活動が成立しない活動内容が見られ、子どもが初めてその歌に出会うことを踏まえ、歌詞の教え込みではなく味わうための援助を考える必要がある。つまり子どもが主体的に歌いたくなる歌唱指導について考えることを求めた。また、歌の魅力は実習生が提示する歌や伴奏によっても伝わり方が異なる。「歌が聞こえるようにピアノと歌のバランスを考えながら弾く」、「子どもたちが手遊び歌を楽しく歌えるようにゆっくり歌う」などピアノ伴奏や実習生自身の歌い方において強弱や速度に関する記載もみられたが、記載がないものも確認されたため、実習生自身がどのように歌い、どのように伴奏をするのかについて記載を求めた。

② 鳴らす（楽器など）場面について

主な添削内容は、実習生がどのように楽器を準備（楽器の種類、数、配置など）し、子どもはどのように楽器を手にとり、どのように片付けるのか記載することである。これら全てを記載した指導案は見受けられなかった。また指導案の中には“歌にあわせて楽器などを鳴らす”といった活動がみられたが（6枚）、「波の表現を楽しめるようにアカペラで歌う」、「ピアノの伴奏は小さめの音で行い、竹の音が感じられるようにする」といった援助の記載がみられた一方で、子どもたちが音を鳴らす際、実習生は歌うのか、ピアノを弾くのか、またその方法などの記載がなかった。そのため、子どもの心が音楽にのりたくなるような援助について加筆・修正を促した。

③ 身体表現する場面について

主な添削内容は、身体表現の際に用いるピアノ伴奏について、速度、強弱、音域、リズム、ニュアンスなどを踏まえて記載することである。例えば、3種類の動物を模倣する身体表現を行う場合において「3つの伴奏を用意する」、「伴奏の強弱やテンポに変化をつける」と記載されており、どのような動きに応じてピアノ伴奏をするのが不明確であった。また、子どもの身体表現を引き出したり、後押し

したり、支えたり、子ども主体の保育を目指す援助としてピアノ伴奏だけでなく、オノマトペの提示も考えられることを伝え、修正を促した。

④ 活動のまとめ場面について

主な添削内容は、片付けるだけでなく、子どもが活動の余韻を味わったり、次回へ期待を持てたりするように記載することである。記載があっても活動内容に沿っていないものや、記載のないものが多くあった。しかしながら、記載のある指導案の中には、歌の雰囲気や余韻を味わえるように「列車の真似をして部屋にもどる」や、次回へ期待が持てるように「またやりたいと思えるように『今度は違う歌でやろうね』と言う」、「活動で使ったペープサートを保育室においておく」、「音を出して遊んだ自然物（石など）を片付ける場所を探す」などとあり、活動の最後まで子どもの気持ちを踏まえようとしていることがうかがえる。

⑤ その他について

他にも、指導案における基本の書き方の理解不足も見られた。活動の流れが複雑すぎる指導案には簡略化を促し、予想される子どもの姿と援助が一致していない指導案には活動の流れが明確にわかるように整えるよう促した。

(3) 添削後の記載について

(2)の添削を基に指導案が再提出された。それらの記載変更例について表1に示す。概観すると、予想される子どもの活動や実習生自身の歌い方やピアノ伴奏に関して具体的に記載された。その際、音楽要素の速度・音域・リズム・ニュアンスの記載が見受けられた。さらに動きを支える援助として、オノマトペが具体的に且つ多様に記載された。このように、子どもたちがより想像を膨らましながらかつ活動を行えるように環境構成や援助を学生なりに再度考えていることがうかがえる。また、このように考えるために学生が実際に活動内容（特にピアノ伴奏）を試した可能性も考えられるのではないだろうか。

(4) まとめ

以上を踏まえ、音楽に関する子ども主体の指導案作成における課題として、まず実習生自身の歌い方やピアノ伴奏の方法など、「(i) 実習生自身が子どもに提示する音楽に関する環境構成や援助を具体的に記載すること」が挙げられる。この記載をうながすことにより、学生自身の歌やピアノ伴奏により音楽的な環境がつくられ、子どもに音楽の魅力が伝わるようにすることが意識される。また学生自身が実際に歌や演奏を試したり、具体的に活動内容をイメージしたりすることにつながるのではないかと考えられる。次に、歌う、鳴らす、身体表現するなど、「(ii) 活動ごとに養護及び教育に対する環境構成や援助」を記載することである。例えば、歌う活動では歌詞の教え込みではなく味わうための、鳴らす活動では楽器の準備や子どもが手に取

表1 添削前と添削後による記載の変更例

場面	添削前	添削後
①	実習生の歌い方に関する記載がない	「子どもたちが歌を聴いて一緒に口ずさめるように、ゆっくりはっきり歌う」 「子どもたちが写真を見て、この生き物はどのように動くのか考えられるようにゆったりと歌いすすめる」
①	歌詞に対する援助の記載がない	「子どもたちが歌うことを楽しめるように、スケッチブックシアターを使い、体を揺らすなど楽しそうに歌う」
②	主活動が歌「海」に合わせてアンサンブルを行うとなっているが、予想される子どもの活動は2点、援助は1点しか記載がない	予想される子どもの活動の記載が増え、それに伴い援助も「・子どもたちが歌に合わせて楽器を鳴らしたいと思えるように実習生が歌う・子どもたちがいろいろな海を想像して楽しめるように歌う速さを変える」など記載された。
③	子どもがどのように楽器を鳴らすのか予想されていない	「歌詞のメロディーに合わせてたり、拍や拍子に合わせて楽器を鳴らす」
④	「自分の好きな生き物の名前を言う」と書かれているが、具体的に予想されていない	予想される子どもの活動において「・魚がいると言う（例：スイスイ、ブクブク）・クラゲ（ユラユラ、シュッシュュッシュ）・カメ（ノソノソ、スイスイ）」などといった具体的な生き物の名前、動き、動きに合うオノマトペの予想が記載された。また上記の援助として「子どもたちが世界観を楽しめるようにテンポを変化させて歌う」が記載された。
⑤	環境構成には「・うさぎ、ライオン、ゾウの3つの伴奏を用意する・伴奏に合わせて4つの動物を動きで表現する・伴奏の強弱やテンポに変化をつける」、予想される子どもの活動には「音楽に合わせて動物の真似をする」と記載され、どのような音楽でどのような動きをするのか具体的に予想されていない	環境構成の記載が、「子どもがウサギをイメージしやすいようにスタッカートが多い伴奏をする」「子どもがゴリラをイメージしやすいように、低い音域で鳴き声の『ウホウホ』を思い浮かべさせるようなリズムを取り入れる」「子どもがゾウをイメージしやすいように自然と体の動きがスローになるように二分音符を用いて伴奏する」に変更され、それに応じた予想される子どもの活動が記載された。
⑥	まとめ（片付けを含む）に関する記載がない	「お家でも楽しめるようにお家に持ち帰ることもできることを伝える」

り片付けるための、身体表現する活動では動きを示すための環境構成や援助に関して記載することが挙げられた。他にも、他領域の指導案作成と共通する課題として、「(iii) 予想される子どもの姿を具体的且つ多様に挙げること」、「(iv) 活動のまとめについてただ書くだけでなく、活動で味わった楽しさの余韻や明日や次回に向けて期待が持てるように環境構成や援助を考えること」が見出された。

4-2 保育実習Ⅰ（保育所）における音楽を用いた部分実習実施の有無と理由に関する検討

保育実習Ⅰ終了後の学生に対して、質問紙調査を行った。質問は、保育実習Ⅰにおいて音楽に関する責任実習を実施したか否か、実施の場合の内容と理由、実施なしの場合の理由である。結果は21名の内、実施が4名、実施なしが17名であった。学生の音楽に関する責任実習の実施の有無やその理由から、学生の音楽に関する指導案の課題を考察した。

(1) 質問紙調査における回答とその理由について

① 実施（4名）

・ 学生が実施した保育内容と対象年齢

「しゃぼんだま」（スケッチブックシアター活用の歌 2歳児クラス）
「まああるたまご」（スケッチブックシアター活用の歌 2歳児クラス）
「ふうせんのうた」（ペープサート活用の歌 2歳児クラス）
「かみなりどん」（絵本を活用した歌と踊り 3～5歳児異年齢クラス）

・ 実施の理由

子どもたちが流行りの歌を歌ったり、手遊び歌を子ども同士でしていたりする姿を見て、音楽遊びの部分保育をしたいと思った。/全部歌うのは難しいと思い、歌詞の「フワフワー」という部分をゆっくりと歌い、みんなで歌って楽しめるようにした。

実施した学生は、0歳児、1歳児クラスでの実習ではなく、2歳児以上で実施したため、育ちの個人差が少なく音楽活動を子どもに合わせてやすかったと考える。すなわち学生は、スケッチブックシアターをある程度の時間集中して見たり、学生の問いかけにタイミングを合わせて応えたり、「かみなりの音に合わせておへそを隠す」など指示を聞いて動いたりする「合わせる」の発達が必要だと考えていると気づかされる。また学生が行う歌唱指導の教材として、スケッチブックシアターは、「めぐり」の特徴と、「歌詞のイメージ」を伝える視覚的効果があり、取り組みやすく活用の可能性が高い教材だと考えられる。

② 担当クラスに合わない、もしくは他の活動が合うと考えた理由での実施なし（12名）

・ 具体的な理由（担当クラスに合わない）

乳児は楽器等の大きい音に驚くと考えていた。大学教員に聞けば良かった。/1歳児の楽器に触れた経験や、歌を好むか等を保育者と事前に話さなかった。実習中「どんぐりころころ」や、午睡前にお気に入りの歌のフレーズを口ずさむ子どもがいて、1歳児でも音楽は身近にあると感じたが、生かし方が分からなかった。/歌ったり踊ったりすることや、歌を伴う絵本を好む姿が見られたが、全く興味を示さない乳児もいたため、言葉や身体の発達の差が大きく、全員で一緒に楽器を使ったり歌ったりするのは難しいと考えた。/発達に差がある3～5歳児の異年齢クラスでの取り入れ方が難しかった。

担当クラスに合わないと考えた理由で実施しなかった4名については、それぞれに今後の課題が見いだされた。1つ目の「乳児には楽器が合わない」という考えは、学生のもつ楽器遊びのイメージの貧弱さが一因だと考える。様々な楽器（たいこや、笛、鈴など日本に古くから伝わる楽器や、世界の楽器）を豊かに紹介したり、学生が触れたりする必要があるだろう。

2つ目の「乳児が歌を口ずさむ姿を見ているのに、責任実習では使えない」という考えは、指導案作成の書き方を導入、展開、まとめなどと細かく指導したことが「使えない」考えの硬さとなったのではないか。乳児保育の指導案について、例えば、「わらべうたを口ずさむ子どもがいる」設定での援助の考え方などの具体例を挙げて指導する必要性が見えてきた。その際には、導入などの形を重視するのではなく、個々の乳児に寄り添う場面に応じた小さな援助や環境構成を指導していきたい。

3つ目と4つ目の「全員と一緒に楽器を使ったり歌ったりするのは難しい」、「異年齢児では難しい」考えは、学生が、これまでの教育経験から歌や楽器遊びの楽しさを、音やタイミングを合わせることに捉えていると考える。音楽はタイミングや、音を合わせることにより、人と心を通じ合う魅力がある。しかし、音がそろって心が通じ合うゴールのために全員一緒に始めなければならないという狭い考えをいったん据え置き、友達を見る、聞く、待つ、などのバラバラの姿からスタートするおおらかさも伝えたい。子どもの内面の多様性を認めて待ちながら音楽の魅力をゆるやかに味わう指導案を考えていきたい。

③ 自信がないという理由での実施なし（3名）

・ 具体的な理由

幼児向けの指導案を乳児に展開できなかった。/授業で作成したとき難しく感じた。/子どもたちが楽しめる指導案を書く自信がない。/ピアノに自信がなく、製作活動の指導案を作成した。

自信がないという理由での実施なし（3名）の学生については、事前指導授業内で自信をつけられていなかったと気づかされた。特にピアノや人前で歌を歌うことに苦手意識をもつ学生らへ、子どもの生活に自然に歌やリズムを取り入れる援助などの指導が課題点として見えてきた。例えば、おむつ交換の際のわらべうたや、散歩や庭での自然の音遊びなど、日常の保育で用いられる音楽に関する保育を伝えられるように工夫していきたい。

④ その他の理由で実施なし（2名）

・ 具体的な理由

実習期間が秋に変わり、準備した活動（海の歌）が合わないと考えた。/担任に運動会に関する製作活動をしてほしいと言われた。

上記のように、学生の思いとは別の理由で実施をしなかった学生がいたことがわかった。

(2) まとめ

事前指導で作成した指導案とは異なる対象児での保育実習であったため、それが実施の少なさに影響していないとはいえないが、指導案作成が紙面上の言葉の書き方の学習にとどまっている可能性がうかがえた。そのため実践的に歌を歌ったり、楽器を鳴らしたり、伴奏したりする授業内容が必要だと見えてきた。

4-3 学内演習における指導案見本の内容に関する検討

以上の事前指導（4-1）と保育実習Ⅰ（4-2）から、授業の工夫として、音楽的な援助・環境構成などを具体的に記載する必要性が見えてきた。そのため、指導案作成の留意事項として①具体的な音楽的環境を挙げ、その他にも、他領域の指導案において指導している②具体的な子どもの活動の予想、③ねらい（教育）に対しての援助、④ねらい（養護）に対しての環境構成・援助、⑤個人差への配慮、⑥片付けと明日へのつながりを指導案見本に記載することとした。また指導案の見本上に各留意事項を下線にて明確に示した（図1）。この6点を示すことにより、学生が自信をもって音楽に関する保育活動をすることを目指した。具体的には、例えば、絵本の言葉をリズムにのせて読む場合に、「歩くように拍をとって読む」援助や、マラカスの音を止める持ち方に「互いに気づくように絵本を置く」などの環境構成を細かく考えておくよう指導した。

4-4 保育実習Ⅱ（学内演習）における最終課題“歌と絵本を用いた指導案作成”に関する感想の検討

学生の感想を内容別に分類したところ、“音楽に関する指導案作成の経験のなさなどによる苦手意識”、“各活動における音楽的な環境や援助、活動内容を考える難しさ”、“各活動において試行錯誤したことによる学び”、“今回の指導案作成による苦手意識の緩和”、“その他”について記載があった（表2）。

“音楽に関する指導案作成の経験のなさなどによる苦手意識”に関する感想からは、事前事後指導において音楽に関する指導案を作成したのにもかかわらず、「音楽に関する指導案はあまり書いたことがなかったので」といった記述があった。その中には、「製作活動の指導案はよく書くので慣れてきたが」と記されており、音楽に関する指導案作成において経験を積み重ねる必要性が改めて見えてきた。

“各活動における音楽的な環境や援助、活動内容を考える難しさ”及び“各活動において試行錯誤したことによる学び”では、歌・楽器・ピアノ伴奏に関する記載があった。まず、歌に関しては、歌を十分に味わうための方法に関して悩んでいる一方で、実習生自身が歌詞を理解し、どのよ

指導計画案の見本（絵本と楽器：留意事項6点）

（部分）半日・一日（コーナー保育）

実習生：三好 伸子 連 桃季恵		指導担当者：みよし むらじ		検印	
10月28日 (コーナー設定3日間)		担当 4歳児	りんご組	人数 20名	
子どもの姿 ・CDをかけて踊る遊び「ステージごっこ」を好む子どもが多い。 ・手拍子などをしてリズムをとり、友達の様子を見ることを楽しむ姿が見られる。 ・保育者が設定した環境設定のまま（台1個と椅子4個）になっている。					
ねらい・安全にマラカス遊びに取り組めるように約束事を話して、収納箱をつくる（養護）			マラカス遊び		
時間	環境構成・準備物	予想される子どもの活動	実習生の援助・留意点		
①	・絵本のリズムやニュアンス（強弱・音の質）の特徴を感じられるように手拍子や声などで以下の雰囲気をつくる ① クネクネさんのフィナーレに向けて盛り上がりかけていくリズムカルな演奏 ② 3人の「マラカス、声、動き」による息の合った様子 ③ パーマさんの全身で音の強弱を表現する元気な演奏 ④ フワフワさんの優しく静かな演奏 ⑤ クネクネさんの意気込みが感じられるリズムカルで躍動的で情熱的な演奏	② 絵本『きょうはマラカスのひ』を見る ・「タイムスかはいない、髪がくるくるしている」などと、姿について言う ・クネクネさんの演奏に拍手をする ③ 3人で並んでいる」と言う。 ・パーマさんの発表を見て拍手する。 ・フワフワさんの発表を見て笑う ・クネクネさんの失敗を見る ・クネクネさんの発表に拍手をする ・「ブラボーってなに」と聞く	③ ④ ⑤ ・主人公（クネクネさん）のマラカス好きなことと、賢明な練習の様子が伝わるように自信をもって読む ・登場人物への関心を認めながら、マラカス発表会に興味をむくように「発表会」の言葉を強調して読む ・登場人物のリズムと気持ちを共有する仲の良い姿に気づくように歩くように拍をとって読む。 ・発表会の世界を共有するように拍手する気持ちを認めていく。 ・静かな優しい表現だと感じるようにやさしい表情と声で読む。 ・クネクネさんの心情を思いやる気持ちに共感して言葉を添えたり、神秘的な表情で読んだりする。 ・クネクネさんの頑張りに対する暖かい心を認め、他の友達もその温かさに気づくようにクネクネさんの言葉として「ブラボー」を説明しながらお礼を言う。	・立ち上がって、まねて踊る ○話し合う ・「やり直してよかった」、「マラカスしたい」、「失敗してもがんばった」などと言う ○タマゴマラカスで遊ぶ ・自分でマラカスを選ぶ ・好きなように鳴らす ・足と頭などを使って踊る ・友達並んで鳴らす ・台にのって鳴らす ・（箱に片付ける） （コーナー保育） ○マラカス演奏の発表をする ・一人で発表する ・友達と揃えて鳴らす。 ・交代で鳴らす ・順番を椅子に座って待つ。 ・待っている間に出す音が出ない持ち方で待つ。（床に置く、布の上に置くなど） ・お辞儀をする。 ・椅子から立ち上がり拍手する。 ・椅子で眠る真似をする。 ・「ブラボー」、「チャオ」などと言う ・「明日もする」などと言う ○片付ける	・思わず動きたくなる気持ちを認めあえるように、クネクネさんの言葉で代弁して認める。 ・自分の意見を伝える満足感を得るように印象に残った箇所を言おうとする気持ちを認めていく。 ⑤ ・絵本の余韻を味わったり、自分で鳴らしたり、それぞれのペースで遊ぶを見守る。 ・自分の表現が十分にできるように試す子どもの姿を認めていく。 ・台で発表したいという気持ちが満たされるように、他の好きな遊びに分かれるように伝える。 ・その子ども独自のリズムや音のニュアンスを発表することに喜びを感じられるように認める。 ・揃えて鳴らす、交代で鳴らす、音をとめるなどのリズム打ちを見つめる楽しさや、発表会のふるまいを表現する楽しさに気づくように、「マラカス奏者」などと言いついていく。 ・友達を見る面白さに共感するために、拍手や「ブラボー」などと声をかけたり、「眠ってた」などと言ったりしながら、絵本の世界も味わっていく。 ・明日も継続したい気持ちに共感して、「また新しいブラボーや、リズムの発表が出てくるかな」などと意欲を励ます。
自己評価	【指導案作成に関する留意事項】 ①音楽的環境 ②具体的な子どもの活動の予想 ③ねらい（教育）に対する援助 ④ねらい（養護）に対する環境構成・援助 ⑤個人差への配慮 ⑥片付けと明日へのつながり		備考・助言		

図1 『クネクネさんのいちにち きょうはマラカスのひ』（樋勝朋巳 文・絵、福音館書店）を活用した楽器遊びの指導案例

うな提示方法が良いのか考えることが必要であると感じていることがわかる。楽器に関しては、「楽器を使っただけの指導案は初めて書いたが」や「楽器に今までほとんど触れてこなかったで」といった記載があり、ピアノ以外の楽器を演奏する機会の少なさから楽器使用の不安が見られる。またピアノ伴奏に関しては、実習生の伴奏が子どもたちの活動の雰囲気に影響すると感じている一方で、どのような音楽要素（速度、強弱、音域、リズム、ニュアンスなど）を踏まえてピアノを弾いたらよいか悩んでいる。これらを踏まえると、本学の授業において歌を歌う機会は多く設けられているため歌うことはできるが、歌を用いて子どもたちと存分に楽しむ方法を学生自身が理解できておらず、楽器演奏の経験が不足しているためピアノ伴奏のみならず他の楽器使用に対する不安や迷いがあることがわかった。このような学生不安や迷いが、音楽に関する指導案作成に踏み切れない理由となるだろう。

一方で、「今回の指導案作成をしたことによる苦手意識の緩和」も確認された。「先生が書かれた指導案をじっくり見て考えたり、それを参考に自分の指導案を書いたりするうちに、書き方がわかるようになってきた」や、「実際に子どもたちと活動すると楽しそうと思うような指導案になったため、書いて終わりではなく、実際に子どもたちとやってみたいと思った」といった記載があり、少なから

ず、指導案作成に指導案見本を用いた効果がうかがえる。また“その他”からは、個人差への配慮など子ども主体の保育に関して、学生なりの気づきが記載されると同時に難しさへの言及もあった。

6 総合考察

本研究は、まず事前指導において提出された音楽に関する指導案の活動内容や教員からの添削などから、指導案作成における課題点を把握し、その後実施された保育実習での実施の有無等を踏まえ、実態に応じた対応を模索することを目指した。一連の流れを踏まえると、やはり音楽に関する指導案作成及び実施に関する苦手意識が根強いことがわかった。その背景について、以下に考察する。

指導案の内容に多く取り上げられる製作活動においては、作ったり描いたりしている時間は子どもに任せており、子どもの自由な表現が保障され、その表現に対しては各子ども（個人）への対応であることが多いだろう。一方、音楽活動のように歌う活動や楽器を鳴らす活動においては、子どもそれぞれに任された時間ではなく、大人の指揮のもと時間が流れていくイメージがあるため、個に対応しつつも集団をまとめていかなければいけない部分が多いといえる。その上、学生は子どもがどのように歌に興味を示して歌っていくのか、子どもがどのように楽器を手に取り

表2 見本提示後の指導案作成による学生の感想例

項目	学生の記述
音楽に関する指導案作成の経験のなさなどによる苦手意識	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽に関する指導案を今まであまり考えてきたことがなかったので、難しいと感じた。 ・製作活動の指導案はよく書くので慣れてきたが、音楽に関する指導案はあまり書いたことがなかったので難しかった。 ・前期にも音楽の指導案を作成したが、子どもたちと実践したいというものにはすることができず、苦手だと感じていた。
各活動における音楽的な環境や援助、活動内容を考える難しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが歌を十分に味わい、楽しむにはどうしたらよいかという点が難しかった。 ・歌をどのようにアレンジして遊びにつなげたりすれば良いのか、音の強弱など細かな部分を考えたりするのが難しかった。 ・楽器を使つての指導案は初めて書いたが、子どもたちが自由に十分に表現できるように様々な面に配慮しながら指導案を作成する必要がある、すごく難しいなと改めて思った。 ・楽器に今までほとんど触れてこなかったので、音楽的環境の構成として適しているのか自信のない箇所もいくつかあった。 ・ピアノの弾き方などまで細かく指導案を考えたことがなかったので、書くのが難しかった。
各活動において試行錯誤したことによる学び	<ul style="list-style-type: none"> ・楽譜と実際の子ども姿を結びつけながら音の強弱や速さを考える大切さを感じた。また、歌詞の意味を理解してなくは、どのように歌うのか等わからなくなるので実習生自身がしっかりと意味を理解した上で歌う必要があると思った。 ・音楽の指導案を書いてみて子どもがどうやったら歌いやすいかや音楽をより楽しめるか真剣に考える機会になった。 ・歌「山の音楽家」の伴奏をする時にはそれぞれの楽器の特徴を子どもたちがイメージしやすいように、弾き方を工夫した。 ・実習生の伴奏や表情、言葉さまざまな要素で子どもたちの活動の雰囲気に影響すると思った。
今回の指導案作成による苦手意識の緩和	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の指導案をきっかけに音楽に関する指導案への苦手意識が減ったので、音楽的要素を含んだ指導案をもっと書けたらいいなと思った。 ・先生が書かれた指導案をじっくり見て考えたり、それを参考に自分の指導案を書いたりするうちに、書き方がわかるようになってきたので音楽に関する指導案を書くことに少し自信がついた。実際に子どもたちと活動すると楽しそうと思うような指導案になったため、書いて終わりではなく、実際に子どもたちとやってみたいと思った。 ・見本や演習、書く留意点を理解し、どのように書いていけばいいのか少し掴めた気がする。これからは音楽に関する保育にも挑戦してみたいなと思った。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽的環境を考えるのは難しかったが、じっくり考えることで、実習生が子どもの気持ちを揺さぶるような環境をつくるのがとても大切だと改めて感じることができた。 ・部分保育で子ども主体を考えるのは難しいと考えていたが、子どもの言ったことを取り入れたり自分で考えたポーズをする子どもを認めたりすることも子ども主体になるのではないかと思ひ、様々な場面で子ども主体を考えられると気づいた。 ・特に難しく書きにくいと感じたのは、個人差の配慮の点である。 ・これまでの指導案では、毎回個人差への配慮を考えることができなかったが、一人ひとり気持ちが違うことを意識してこれからの指導案にも活かしたいと思う。 ・予想される子ども姿も、実習時に見られた子ども姿（3～5歳児の異年齢クラス）を思い出しながら考えた。実際に子どもたちの姿を見たり対話したりしたことを通して得られたことなのだと感じた。 ・私は幼稚園の頃歌が大好きだった。当時は教えられていると押し付けに感じたこともなかったし先生はどうやって歌を教えてくださいたいのだろうと思った。

り音を出していくのか、子どもがどのように動くのかといった年齢ごとの予想が学生には難しいことが確認され、だからこそ活動展開の方法に自信が持てない可能性があると考えられる。また、学生の音楽経験には個人差があり、ピアノだけでなく、他の楽器に対する経験が浅いため楽器を使いこなせる自信がなく、やってみたい気持ちがないわけでもないが、子どもに提示することに不安を感じている学生もいた。以上を踏まえると、保育実習事前指導だけでなく、それ以前に実施される音楽に関する授業から改善していく必要性がうかがえた。以下に示す3つは、事前指導と音楽に関する授業内容の改善点である。

まず1つ目は、指導案を作成する前に、学生自身が音楽の多様な素材（わらべうた、手遊びうた、童謡、楽器、手づくり楽器、動きを伴う音楽遊びなど）に触れ、各素材の魅力や存分に味わえる音楽活動を体験する場を繰り返し設けることである。その際、学生の音楽の経験度にかかわら

ず、“子どもたちとやってみたい”、“できそうだな”といった気持ちが芽生えるような工夫が必要である。「私は幼稚園の頃歌が大好きだった。当時は教えられていると押し付けに感じたこともなかったし先生はどうやって歌を教えてくださいたいのだろうと思った」(表2)といった感想もあり、歌は凝った方法でしか楽しさが伝わらないわけではなく、歌そのもの、学生の声そのものに魅力があることや歌唱指導の場だけでなく日常の中にも子どもと歌の楽しさを共有する場があることを学生と確認したい。

2つ目は、指導案作成において音楽的な環境や援助を含む6つの留意点(4-3)と活動ごとに記載が必要とされた事項(4-1)を学生に示すことである。音楽の指導案作成において歌う、鳴らす、身体表現する活動がみられ、各活動に応じて記載すべき事項が見出された。これらを示すことにより、指導案作成における活動の流れ等が整理されるのではないかと考える。また音楽的な環境や援助を記載す

ることについて、学生の感想に「音楽的環境を考えるのは難しかったが、じっくり考えることで、実習生が子どもの気持ちを揺さぶるような環境をつくるのがとても大切だと改めて感じる事ができた」(表2)とあるように、歌、楽器、身体表現の魅力に応じて、子どもに音楽素材を提示すること自体が、子どもの心を揺さぶり、子ども主体の活動になる第一歩であるように思われる。しかしながら、学生は難しさも感じており、音楽的な環境や援助の記載をうながすことにより、指導案作成への壁とならないようにしたい。そのため、どの音楽要素を意識することでどのように音楽の伝わり方が変わるのかについて、具体的な要素(音楽の速度、強弱、音域、リズム、ニュアンス、音楽を視覚化する身体の動きなど)を挙げて、1、2年次の音楽に関する授業から3年次への事前指導に向けて、体験を踏まえた連続的な学びとなる必要がある。

3つ目は、作成した指導案を基にした音楽素材の実践を反復することである。音楽的な環境や援助を含む6つの留意点を記載した指導案見本を提示したことにより、学生は難しいと感じながらも、活動内容を具体的に考えて、音楽的な環境や援助を指導案に書こうとするようになった。し

かしながら指導案を作成しても、保育実習での実践に結び付かないことを踏まえると、模擬保育などにより指導案で用いた音楽素材を実践し、教員の助言や学生同士のやり取りを重ねて、自信をもって実践できる内容に作りなおしていく作業が必要であると考えられた。その際、教員は予想される子どもの姿を踏まえた助言が求められる。予想される子どもの姿については、「実習時に見られた子どもの姿(3~5歳児の異年齢クラス)を思い出しながら考えた」(表2)とあるように、学生自身の経験の積み重ねが必要である。しかし実習前においては、教員の経験などにより、対象児や活動内容に応じた子どもの姿を伝えることで学生は安心を得られるのではないかと考える。

本研究を踏まえ、保育実習において音楽の側面と子ども主体の保育の側面について、各側面が相互に支えるような保育活動を学生が考えられるように、筆者らの専門性(音楽と保育)を生かしながら、授業内容を継続検討していくことが今後の課題である。

(連: 1, 3, 4-1, 4-4, 5)

(三好: 1, 2, 4-2, 4-3)

注

- (1) 三好伸子・連桃季恵(2021) 子ども主体の保育実習指導案作成に関する授業方法(1)―レッジョ・エミリアの保育思想を通して―. 日本保育学会第74回大会発表論文集. 229-230.
- (2) 連桃季恵・三好伸子(2021) 子ども主体の保育実習指導案作成に関する授業方法(2)―野菜スタンプ・氷絵あそびのグループ演習と添削の効果―. 日本保育学会第74回大会発表論文集. 231-232.
- (3) 三好伸子・連桃季恵(2022) 子ども主体の保育実習指導案作成に関する授業方法(3)―音楽に関する保育指導案の問題点―. 日本保育学会第75回大会発表論文集. 211-212.
- (4) 連桃季恵・三好伸子(2022) 子ども主体の保育実習指導案作成に関する授業方法(4)―音楽に関する学生の保育指導案からの考察―. 日本保育学会第75回大会発表論文集. 213-214.
- (5) 前掲(1)
- (6) 前掲(2)
- (7) 牧野利子(2012) 保育者養成課程の音楽指導を考える No.3: 音楽Ⅲの授業実践を通して. 川口短大紀要, 26, 129-144.
- (8) 牧野利子(2017) 保育者養成課程の音楽指導を考える

No.4: 模擬授業の実践を通して. 川口短大紀要, 31, 49-60.

(9) 同上

謝辞

2021年度の保育実習Ⅰ(保育所)及び保育実習Ⅱ受講学生に対して感謝の意を表し、本研究が学生たちの今後の学習意欲につながることを期待します。

付記

本研究における「音楽に関する指導案作成」に関する検証の一部については、2022年度日本保育学会第75回大会における三好・連「子ども主体の保育指導案作成に関する保育実習授業方法(3)―音楽に関する保育指導案の問題点―」及び、連・三好「子ども主体の保育実習指導案作成に関する授業方法(4)―音楽に関する学生の保育指導案からの考察―」で発表している。